

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 4 月 26 日現在

機関番号：13301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24530811

研究課題名(和文)現代青年の友人関係における心理的脆弱性と社会適応の関連に関する研究

研究課題名(英文) Psychological vulnerability and social adaptation on friendship among present-day adolescents

研究代表者

岡田 努 (Okada, Tsutomu)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：10233339

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題では、現代的対人恐怖の型である「ふれ合い恐怖的心性」を測る尺度について不安を感じる場面との関連において再検討を行った。高校生、大学生に対する質問紙調査の結果、「対人退却」の性質が高い者は「情動的に遠い他者」との対人場面よりも「情動的に近い他者」との場面に不安を感じる一方で、「関係調整不全」が高い者は反対に「情動的に遠い他者」との対人場面に不安を感じていた。このことから、「対人退却」下位尺度が「ふれ合い恐怖的心性」の中核的な性質を測っている反面、「関係調整不全」下位尺度は従来から見られる一般的な対人不安を測っていることが明らかとなった。

研究成果の概要(英文)：This study aims to explore the vulnerability on friendship among present-day adolescents. Surveys toward senior high school and college students to confirm the structure of "commu-phobic tendency" scale. The results yielded that adolescents who showed high in "withdraw from others" subscale had high anxiety with emotional close others rather than with emotionally distant ones. On the other hand, adolescents who showed high in "to feel difficulties to moderate their relationship" subscale had high anxiety at the situation with emotionally distant others. These results suggest that the "withdraw from others" subscale shows the fundamental characteristics of the commu-phobic tendency, while the subscale of "to feel difficulties to moderate their relationship" shows the characteristics of common anthropophobic tendency.

研究分野：青年心理学

キーワード：現代青年 ふれ合い恐怖的心性 対人恐怖的心性 友人関係 自己愛

### 1. 研究開始当初の背景

現代の日本の若者は「他者との軋轢を避け」「自分の慣れ親しんだ世界にこもる」傾向が指摘されている。たとえば、昼食を一人で食べる姿を他人に見られることを恐れトイレの個室などに隠れて食事を採る{ランチメイト症候群}の大学生などがマスコミで話題になっている。こうした心理的脆弱性は、若者の「内向き指向」など消極的でチャレンジ精神の薄い若者像とも通じる。一方、現代社会は、あらゆる領域でのグローバル化が進展し、また世界的な不況や大震災からの復興など、人智を尽くして立ち向かうべき課題が山積している。こうした現状において、傷つきやすく軋轢を避ける脆弱な若者が増加することは、日本社会の浮沈に関わる重大な問題である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、現代の青年に特有な心理的脆弱性(対人関係における傷つきやすさ)と、現代的対人恐怖とされる「ふれ合い恐怖的心性」や自己愛的人格特性および、近年、若者の間で見られる「ランチメイト症候群」など社会的不適応との関連を総合的に検証するものである。特に「ふれ合い恐怖的心性」の構造について再検討を行い、モデルを再構築することによって、現代青年がもつ心理的脆弱性の基本構造を解明する。検討にあたっては、ふれ合い恐怖的心性の尺度と、不安を感じる場面に関する尺度を整備し、両者の関係を明らかにする。またこれらと、青年の友人関係や自己意識、自己愛等、心理的な問題行動に関連する意識項目との関係を検討する。これらのことを通して、現代青年の対社会的な積極性を支援するための知見を提供することを目的とする。

### 3. 研究の方法

高校生および大学生に対して質問紙調査を実施した。調査は紙媒体による調査および、モニター型インターネット調査を実施した。

#### (1) 調査1

[調査対象者] インターネット調査を利用し、登録モニターによる匿名の調査を実施した。

回答者は日本全国都道府県の国内各県の4年制大学学生および卒業生 206名(男女それぞれ103名 19歳~25歳)であった。実施時期は2013年7月であった。

[尺度項目]

①不安場面項目 岡田(2002)が作成した項目のうち表現が陳腐化したものを訂正しこれに予備調査に基づいて作成した4項目を加えた40項目の対人場面について、安心度を尋ねた。選択肢は「1そのような場面は経験がない」「2とても不安である」~「7とても安心できる」の7段階であった。

②ふれ合い恐怖的心性尺度 岡田(2002)において作成されたもので「関係調整不全」「対人退却」の下位尺度から成る。「1まったくあてはまらない」~「6とてもあてはまる」の6

段階であった。

③対人関係尺度 従来から見られる対人恐怖の特徴の度合いを測るために用いられた。永井・岡田(1987);永井(1994)が作成した一般健常者における対人恐怖的心性に関する尺度で以下の下位尺度から成る。集団にとけこめない、気恥ずかしいなど対人状況における自分自身の行動、態度、話し方、振る舞いなどにおける支障を示す「対人状況における行動・態度の諸特徴(以下「対人状況」と表記する)」、対人場面で他者からどのように見られているかという問題意識である「他者との関係における自己意識」(以下「関係的自己意識」と称する)、自分自身に対する自信のなさを示す「内省的自己意識」である。「1まったくあてはまらない」~「6とてもあてはまる」の6段階であった。

#### (2) 調査2

[調査対象者] モニター型インターネット調査および紙版の調査により登録モニターによる匿名の調査を実施した。インターネット調査の回答者は国内各県の4年制大学学生および卒業、有効回答数206名(男女それぞれ103名, 19歳~25歳)で、実施時期は2013年7月であった。

紙版質問紙調査は4年制大学学部学生1から4年生有効回答者数155名(男性47名 女性108名, 年齢18~24歳)で、実施時期は2013年12月から2014年2月であった。

[尺度項目]

調査1と同様の尺度項目を用いた。

#### (3) 調査3

調査対象者 インターネット調査を利用し、登録モニターによる匿名の調査を実施した。回答者は日本全国都道府県の高校生 有効回答数187名(男性88名, 女性99名, 1~3年生, 15歳~18歳)で、実施時期は2015年12月であった。

[尺度項目]

①不安場面項目 調査1, 2と同様に岡田(2002)を元に再編した40項目の対人場面について、安心度を尋ねた。項目内容は調査2の大学生用の項目から高校生の生活に適合するよう変更を加えた。「1そのような場面は経験がない」「2とても不安である」~「7とても安心できる」の7段階であった。

②ふれ合い恐怖的心性尺度 岡田(2002)で作成されたもので「関係調整不全」「対人退却」の下位尺度から成る。

③対人関係尺度 研究1と同様の尺度である。尺度②, ③は「1まったくあてはまらない」~「6とてもあてはまる」の6段階であった

### 4. 研究成果

#### (1) 調査1

不安場面項目について探索的因子分析を行い、3因子を抽出した。各因子は「1 公的場面・年長者の前」「2 心情的に遠い他者との場面」「3 心情的に近い他者との場面」と解釈された。各因子を代表する項目について合成得

点を求め、関係調整不全ないしは対人退却を統制変数として、他方の変数と不安場面項目の間の偏相関係数を求めた。その結果、「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」は関係調整不全との相関（偏相関）が見られる一方、「心情的に近い他者場面」では対人退却との偏相関が見られた。すなわち、心情的に近い他者との間でのふれ合い状況は、まずふれ合い恐怖を高めこれが「対人退却」との関係に表れていると考えられる。一方、「関係調整不全」は偏相関が0に近く直接にはこうした場面からの影響は受けけないものの、疑似相関が見られたことから、対人退却の結果として退却が生じたものと考えられる。一方「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」については、対人退却の効果を除いてもなお、直接的に対人退却との関連が見られた。これらの場面は、従来型の対人恐怖においても不安が生じやすい場面（出会い場面）と考えられる。すなわち、ふれ合い恐怖以外の従来から見られる対人恐怖によって生じた退却が示されていると考えられる。対人関係尺度得点との関連においても関係調整不全と同様「対人退却」を統制した「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」に相関関係が見られ、同様の側面が現れたものと考えられる。関係調整不全を統制した場合にもこれらの場面での相関関係が見られた。これは、ふれ合い恐怖の心性を除去した従来型の対人恐怖の心性が、近くない他者への不安感を表していることを示している。言い換えれば「関係調整不全」下位尺度はふれ合い恐怖の心性と従来型対人恐怖の両側面が含まれた概念であることが示唆された。

## (2) 調査 2

### ① インターネット調査との比較

(1) 尺度得点の差 ふれ合い恐怖の心性尺度および対人関係尺度の各下位尺度について岡田(2013)のインターネット調査との間で検討した結果、有意差が見られたものについても、それらの効果量は小～中程度がほとんどで、大きな差といえる効果量が見られたのは関係調整不全のみであったことから、両群で実質科学的差があると明確には言えないと考えられた。

### ② 不安場面項目の因子構造の違い

両群を一括したデータについて因子分析を行い、3因子を抽出した。その結果、「1 公的場面・年長者の前」「2 心情的に遠い他者との場面」「3 心情的に近い他者との場面」と解釈された。

### ③ 尺度間の相関

「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者との場面」では対人退却との偏相関は見られず、関係調整不全との負の相関が見られた。反対に「心情的に近い他者との場面」では対人退却との間でのみ負の相関が見られた。さらに、心情的に近い他者と「関係調整不全」は疑似相関が見られながら偏相関が0に近かった。以上のことから、ふれ合い恐怖的な青年

は、「対人退却」に見られるような対人関係の場から引くことで、ふれ合い恐怖の心性による不安感を防衛していると考えられる。このことは、岡田(1993)が指摘する、他者の視線からあらかじめ退却した所で安定しているふれ合い恐怖の青年の特徴とも符合する。逆に言えば従来型の対人恐怖の心性の者は、そうした方略を用いず対人関係の場にとどまることで、不安感を抱えているとも言えるだろう。

一方「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」と関係調整不全の間では、対人退却の効果を除いてもなお、直接的に関連が見られた。以上のことから、この2つの場面は、従来型の対人恐怖においても不安が生じやすい場面（出会い場面）と考えられる。すなわち、関係調整不全は従来型対人恐怖と共通する特徴であり、ふれ合い恐怖以外の従来型の対人恐怖によって生じた退却が示されていると考えられる。

従来から見られる対人恐怖の特徴である対人関係尺度得点との関連においては、対人状況と内省的自己意識において、「関係調整不全」を統制すると「公的場面・年長者の前」と対人関係尺度各下位尺度の関係がゼロ次相関に比べ大きく低下していた。このことから「関係調整不全」は従来型対人恐怖と重なる性質を持つことが考えられる。一方で「対人退却」を統制した「公的場面・年長者の前」「心情的に遠い他者場面」の間では各下位尺度とも相関関係が見られたことから、「対人退却」は従来型対人恐怖とは異なる側面であると考えられる。

## (3) 調査 3

不安場面尺度について、探索的因子分析を行い、2因子を抽出した。項目内容からそれぞれ「心情的に遠い他者場面」「心情的に近い他者場面」と命名された。不安場面尺度の因子分析の結果、大学生とは異なる因子構造ではあったが、心情的に近い他者と遠い他者といった区別は大学生と共通して見出された。

次に、ふれ合い恐怖尺度の各下位尺度を統制変数とした偏相関係数を求めた（表）。

表 不安場面尺度と他の尺度との偏相関係数、( ) 内は統制変数

尺度 / 場面	心情的に遠い	心情的に近い
	他者場面	他者場面
ふれ合い恐怖の心性		
関係調整不全(対人退却)	-.300	-.108
対人退却(関係調整不全)	.085	-.263
従来型対人恐怖の心性		
対人状況(対人退却)	-.373	-.067
関係的自己意識(対人退却)	-.298	-.003
内省的自己意識(対人退却)	-.244	-.006
対人状況(関係調整不全)	-.193	-.061
関係的自己意識(関係調整不全)	-.139	.111
内省的自己意識(関係調整不全)	-.062	.088

その結果、ふれ合い恐怖の心性の「関係調整不全」は心情的に遠い他者場面との間で負の偏相関が見られ、「対人退却」は近い他者場面との間で負の有意な偏相関が見られた。また、従来型対人恐怖はふれ合い恐怖の対人退却を統制した場合にのみ、遠い他者場面との

間で弱い負の偏相関関係が見られた。このことから関係調整不全は従来型対人恐怖と共通する側面である遠い他者への困難さを示し、対人退却がそれとは区別される近い他者との困難さを意味すると考えられた。こうした点は大学生データと符合する。

以上の調査結果をふまえ、今後、ふれ合い恐怖的心性、ランチメイト症候群など青年の脆弱性に関わる人格特性それぞれと友人関係の現代的特徴の関連について詳細に検討を行っていききたい。

またこれらと一般的なパーソナリティ特性との関連について、次期の科学研究費研究課題において発展的に検討を行う予定である。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計 6 件)

- ① 岡田 努 「ふれ合い恐怖的心性」の対人関係について：高校生調査から 日本社会心理学会第 57 回大会, 2016. 9. 18 関西学院大学 (兵庫県・西宮市)
- ② 岡田 努 青年が自分を大人である・ないと考える理由 日本心理学会第 79 回大会, 2015. 9. 23 名古屋国際会議場 (愛知県・名古屋市)
- ③ 岡田 努 「ふれ合い恐怖的心性」の対人関係について (2) : インターネット調査との比較 日本社会心理学会第 55 回大会, 2014. 7. 27 北海道大学 (北海道・札幌市)
- ④ 岡田 努 ふれ合い恐怖的心性の対人関係について：インターネット調査による試み 日本社会心理学会第 54 回大会, 2013. 11. 2 沖縄国際大学 (沖縄県・宜野湾市)
- ⑤ 岡田 努 青年期の「ふれ合い恐怖的心性」と「傷つけ合うことを回避する」傾向の関連について 日本教育心理学会第 54 回総会, 2012. 11. 25 琉球大学 (沖縄県・西原町)
- ⑥ 岡田 努 現代青年の友人関係のあり方と「ランチメイト症候群」傾向の関連 日本社会心理学会第 53 回大会, 2012. 11. 18 つくば国際会議場 (茨城県・つくば市)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

岡田 努 (OKADA, Tsutomu)

金沢大学・人間科学系・教授

研究者番号：10233339